

## 社会問題に向きあうキャリア教育の実践と課題

—成城大学キャリア開発演習科目を例に—

勝 又 あず さ

日本のキャリア教育は、1999年の中央教育審議会答申にて、教育課程におけるキャリアの学習、キャリアガイダンス、カウンセリング、インターンシップなど、「学校教育と職業生活との接続」を図るひとつの方策として提案された。現在に至り文部科学省(2015)の次期学習指導要領素案において、「将来の予測が困難な複雑で変化の激しい社会やグローバル化が進展する社会」に求められる資質・能力は(1)主体的な判断力、(2)多様な人々との協働、(3)新たな価値の創造、と示されている。

菅原(2017)は、キャリア教育がなされなければならない理由の本質を次のように述べている。個々の人間の生き方は、その人間に拠っていることであり、その人間の未来は誰にも予測することはできず、努力だけではどうにもならない偶然に負うところが大きすぎるところにある。生きていく上で重要な判断が必要になった時、困難な状況に陥ったときに、自らが知恵を絞って生き方を考え、より良い方向に行動していく能力が必要とされる。この「生きていく上での必然の知恵」を考えることがいかに重要かを理解させ、その知恵の種をまくことこそがキャリア教育に他ならない。

これからのキャリア教育において、社会の様々な問題と自身のキャリア形成をつなげ、不確実な社会で多様なキャリアを個々がどう形成していくかが重要なテーマになるであろう。本稿では、成城大学キャリアデザイン科目群において、「社会の現実と様々な問題に向きあいながら不確実で変化が激しい社会を自律的に生きること」をテーマに開講した演習科目の実践・課題と、履修生の

学びについて報告する。対象科目「アドバンス・プログラム」(以下:本科目)において、ライフキャリア形成の過程であえて考えてもらいたい避妊と不妊, 児童養護, ホームレス, 孤独死など, 生と死に関する社会問題について専門家から話を聞き, 現場に出向き, 議論を深め, 終盤には総まとめとして個々に自身の意見を語る機会を設けた。授業終了時に履修生から「問題を知れば知るほど理解が深まる, 身のまわりのあたりまえはあたりまえでない」「知る・体験するのみでなく, 自分ごととして考え, 表現し議論をすることが重要である」「自分の知らないことばかりで, 始終もやもやとしながら授業が進んだ」といったコメントがあった。活動成果の発表をゴールにせず正解がない問題を追究していくことを重視した。「当事者意識を持ち社会問題とキャリアを考える習慣づけ」を到達目標においたこの授業を例に, 新しいキャリア教育の在り方を考察する。

## 1. 日本の大学におけるキャリア教育とプロジェクト型・演習科目

独立行政法人日本学生支援機構(2017)によれば, 国内の大学(754校)のうちキャリア教育を必修科目として設置している大学は58.4%に及ぶ。しかしその内容は様々で, 企業説明会や就職活動対策講座, インターンシップ事前研修といった, 研修, セミナー, 講座に単位を付与する大学も少なくない。

一方, 日本の大学のキャリア教育のプロジェクト科目においては, 企業による寄附講座をはじめ, 学外よりゲストを招聘, あるいは連携をはかり実施するキャリア教育PBL(Project Based Learning)が増加傾向にある。そのような中, 企業は社会貢献として参画し, 一方学生は見栄えのよいプレゼンテーションをすべく手段が目的になりリアルな体験に至らず, また活動の意味づけや振り返りが無いまま授業を終了する科目も少なくない。プロジェクト型演習における教育目的が定まらず, 学生の成長やその評価が曖昧なことも指摘されている。

本科目では, 社会問題の中でこれまで扱われにくかったテーマにあえて挑み, 正解がない答えを考え議論を繰り返した。キャリア観醸成のためには自身のキャリアデザインだけでなく, 自身をとりまく社会でおきる問題とその背景を学ぶことが重要であり, そのためには実際に足を運び体験する。多様なキャリアを肌で感じることにより, 不確実な社会を前向きに捉え, 直面した課題を乗り越える意識が形成できると考えている。

## 2. 社会問題と多様性教育の他大学における実践例

大学の特徴を活かしたプロジェクト・演習科目や活動が開講されている。先行研究として社会問題・人権問題をテーマに開講している2つの授業を紹介する。テーマ設定、関わる人々、学生への権限移譲、振り返り、実践の継続性等を本科目の授業実践の参考にした。

### 2.1 「生活者の社会参加」(慶應義塾大学総合政策学部)

自ら学び気づくことを重視した“教えない授業”としての体験学習型の正課科目。社会参加活動のアイデアをもつ履修生が他の履修生に“この指止まれ”方式でメンバーを募り、グループワーク形式でプロジェクトを進めていく。アイデアを形にして実践することを求めているため、現実にはうまくいかないことの方が多いが、謙虚に事実に向き合えばむしろ失敗から多くを学ぶことができる。地域住民との協働プロジェクト「キャンドルナイト湘南台」をはじめ、

図1 生活者の社会参加 概要

---

社会やコミュニティの課題に取り組む様々な方策のひとつとして、生活者の社会参加があります。多様化する社会問題へのアプローチと個人の自律という観点からも生活者の社会参加に期待が寄せられていますが、実際の活動となると、なかなか一歩を踏み出しえないのが実情です。この授業は体験学習プログラムとして、学生グループが主体的にNPOスタッフ、主婦、公務員、企業の従業員といった人達と交流や協働しつつ、自らも含めて多様な“生活者の社会参加”を促進する仕掛けづくり・仕組みづくりをめざして活動し、最終的にはそのための実践や提案を行うものです。一連の学習プロセスを経て、生活者の社会参加の意義や可能性について深く考察するとともに、翻って自らのライフキャリアに、社会参加というテーマを位置づけるうえで拠り所となるような学習機会の提供をめざしています。

生活者の社会参加とは何か。履修者は実際にテーマを持って動き、多様な組織や個人に働きかけ、考え続ける中でそれを見出そうとします。基本は「この指とまれ」方式のグループワークで、テーマ設定やグループ結成、通常のグループ運営に関しては、履修生の問題意識や主体性を重視します。まずは問題意識とアイデアを持つ学生たちが活動テーマを提案して仲間を募り、その他の履修者が呼びかけに応えることで活動グループが複数形成されます。それらのグループが、設定したテーマの妥当性の検証から始めて、最終的には自分たちのみならず、一般生活者の社会参加を促す独自のイベントやキャンペーンの実現をめざします。こうした一連のプロセスで出会う組織・団体や多様な生活者との関係構築や協働は、自分たち学生グループのあり方や関わり方についての深い問いを生み、生活者の社会参加を考察するうえで重要なヒントをもたらすでしょう。さらには、ライフキャリアの観点から、自分自身の生き方と社会参加との関係についても考えを巡らせる予定です。なお、授業時間は、情報提供の機会であると同時にグループワークを側面からサポートするためのコミュニケーションの機会として、あるいは問題意識を深める機会として、グループ討議や発表、相談などにも充てます。

慶應義塾大学2017年度シラバスより抜粋

---

年に1グループは注目すべき活動が誕生し、授業終了後も主体的な学生の活動へと発展し、後輩に受け継がれていくケースも出ている（櫻田 2010）。

授業では、初回のオリエンテーションの後、履修者よりテーマ募集する。テーマ提供者が概要を説明し質疑応答を経て、その他の履修者は提案テーマから選択しグループを編成する。グループ活動と併行して授業では、活動計画発表、中間発表、最終発表を行う。全15回の授業の中では、授業担当教員による講義「活動テーマの妥当性の検証とリーダーシップ」、「社会参加とチーム運営」、「生活者へのアプローチ」、「キャリア自律と社会参加」等がある（櫻田 2010）。

## 2.2 「ヒューマンライブラリー」（駒澤大学）

坪井 (2017) によると、ヒューマンライブラリーは「偏見を提言する」「ココロのバリアをとく」「多様性に寛容なココロを育てる」等の実践的イベントとして、2000年にデンマークで初めて開催され、その後世界70カ国以上で開催されている。生きた人間を図書館の本に見立てて一般読者に貸し出すという仕掛けに意外性があり、それが身近な異文化へ近づきやすさも演出している。図書館使用の演劇的空間での親密な対話をもたらす他者理解の効果、生きた本の自己開示が生み出す新たな生きる勇気や希望、対人関係改善の効果が期待される（坪井 2017）。

人間図書館 (Human Library) という簡単な仕掛けが、未知の他人同士の心のバリアフリーを溶かし自己変容と新たな対人関係の構築をもたらす。

「本」になる人は多くの場合、障がい者、LGBT、薬物依存症、難民、マイノリティの人、偏見を持たれやすい人、生きにくさを抱えた人が選ばれる。「本」と「読者」（参加者）と「司書」（主催者）は、60cm から1mの距離で約30分間の対話をする。そこでは、1. 対等な地位、2. 共通する目標、3. 制度的支持、4. 親密な接触（少人数の対話）が満たされている。「読者」の異文化間能力においては、対話前の無関心が、対話初期には好奇心・傾聴力へ、対話中期には自己開示・返報性、対話後期には再帰性、対話後には寛容性・柔軟性を獲得する。「本」のナラティブ効果や「司書」役を学生が担う場合のアクティブ・ラーニング効果も実証済である（坪井 2017）。

### 3. 成城大学におけるキャリア教育と科目設置背景

成城大学（東京都世田谷区）では、「キャリア教育」と「キャリア支援」・「就職活動支援」を連動しながら学生を支援している。キャリア教育においては、2011年度より「就業力育成・認定プログラム」（参加申し込み型）を開始し、学生は大学4年間を通して職業観・勤労観を醸成していく。本科目は2014年度より開講し、初年次演習科目「スタート・プログラム」の後続科目として、また、キャリア教育集大成科目「チャレンジ・プログラム」の前提科目として設置している。本科目は「就業力育成・認定プログラム」参加者以外の学生も履修可能で、学生の主体性・能動性を促す「体験」を重視している。

本科目では、3つのプロジェクトを設け、学生の興味関心を促しアイデアを提案し発表するといった形式で進めてきたが、アイデアを発信すること自体がゴールになり、自分ごととして向き合うことなく深く真剣に語り合う機会に至らなかった。新規開講から4年目となる2017年度には、3年間の実践を振り返り、テーマ設定において、1. これまで考えなかった、考えにくかったテーマ、2. 真剣に当事者意識をもち向き合える内容であり、3. 自身のキャリア形成に良い意味での揺さぶりをかけることを前提に、大学の授業ではこれまで触れにくかった「性教育」をはじめ「貧困問題」「孤独死問題」をとりあげた。専門家を招きテーマを慎重に扱い、多様な価値観・生活環境を生きる方々との交流、分かち合い、それぞれの気づきの共有を大切に活動した。履修生の自己開示もあり、互いのプライバシーを尊重しあう場を全員に促した。

図2 成城大学キャリアデザイン科目（2017年度）

	講義科目	演習科目
1年	キャリア形成 I-IV（計4科目）	プロジェクト演習 I-IV（計4科目）
2年	時事英語 I・II 職業選択 業界企業分析	スタート・プログラム アドバンス・プログラム
3年	ワークライフバランス論 時事問題研究	
4年		チャレンジプログラム

## 4. 正課科目「アドバンス・プログラム」の実践

### 4.1 科目基本情報（2017年度）

対象 全学部 2, 3 年生

開講曜限 前期金曜日 5 時限目 2 単位（計 15 回）

単位数は 2 単位で卒業要件単位数に算入されない

履修者数：8 名

内訳：2 年生（5 名）・3 年生（3 名）

社会イノベーション学部 3 名，経済学部 2 名，文芸学部 2 名，

法学部 1 名

過年度

2016 年度：23 名（月曜 5 時限目）

2015 年度：18 名（留学生 2 名を含む）（月曜 5 時限目）

2014 年度：23 名（火曜 3 時限目）

2017 年度の履修者数減少は，金曜日 5 時限目に設置したことも考えられる。

### 4.2 科目内容（2017 年度シラバスより抜粋一部改編）

#### 授業概要

3つのプロジェクトを通して「社会を生きる」をテーマにライフスキルを高めあう演習科目。3つのプロジェクト「命を授かること」，「ホームレスと社会問題」，「死について考える」を通して生き方の多様性について学ぶ。プロジェクトごとにゲスト講師を招き，講師から与えられる課題に当事者意識をもち臨み，自分の意見を自分の言葉で述べながら価値観の多様性について学んでいく。

#### 到達目標

履修者は，多様なキャリアに真摯に向き合い，「自分と他者と社会と共に生きること」を意味づける。とりまく社会の現状を理解し，自分自身は今，何ができるか・すべきか・したいかを考える。このプロジェクト活動を自身のキャリアにどう繋げていくか，その学びの感覚を鍛える。また，各自が得たことを授業で共有し，日々のあらゆる場面に多様な学びの要素があることを知り，学

びと気づきを生活に習慣づける。

## 授業の方法

3つのプロジェクトそれぞれに、講義、課外活動（視察・見学）、議論を深める場を設ける。プロジェクト1では不妊カウンセラーをゲスト講師に招き、出産をめぐる課題について考えていく。課外活動は乳児院を訪問。プロジェクト2ではビックイシュー東京事務所長をゲスト講師に招き、ホームレスと社会問題について学ぶ。課外活動は「道端留学」（路上で「BIG ISSUE」誌の販売体験）に参加した。プロジェクト3では寶林寺新堂（卒業生）をゲスト講師に招き、死をめぐる社会問題について学ぶ。都内のお寺を尋ね、住職に死生観や法要の現状について聴き、坐禅や読経を体験する。各自の学部学科での専門的な学びを互いにアウトプットし「コミュニティ・オブ・プラクティス」（相互成長の場）を形成していく。最終回では自分が何を学び得たかについて全員が学びのスピーチを行う。既履修生が Student Assistant（以下 SA）としてサポートを行う。

表1 アドバンス・プログラム 授業15回のながれ

1		ガイダンス
2	プロジェクト① 避妊・不妊・あかちゃん 遺棄問題	オリエンテーション・講義「命を授かること」
3		課外活動：乳児院見学（信濃町）
4		チームごと課題を見つけて整理する
5		社会人講師と課題について議論する
6	プロジェクト② ホームレスと社会問題	オリエンテーション・講義「ホームレス問題と BIG ISSUE の取組み」
7		課外活動：道端留学（新宿）土曜日実施
8		チームごと課題を見つけて整理する
9		社会人講師と課題について議論する
10	プロジェクト③ 死生観と孤独死問題	オリエンテーション・講義「お寺の在りかた」
11		課外活動：坐禅体験（北青山）
12		チームごと課題を見つけて整理する
13		社会人講師と課題について議論する
14		ファイナルプレゼンテーション・懇親会（公開）
15		授業の総括

図3 授業計15回（3つのプロジェクト）の学びのサイクル

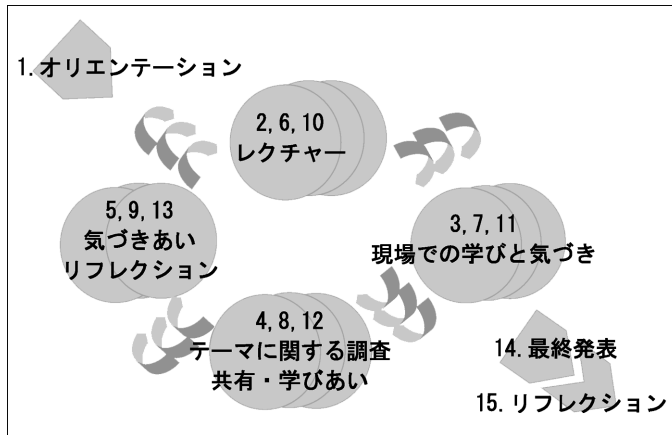


図4 成績評価基準

1. 授業への参加姿勢・実績（単位取得には計15回のうち10回以上の出席が条件）  
授業1回あたり4点…計60点
  2. 個々の取組み・貢献（各ステップにおける個人の実績）  
授業全15回でトータル…計30点
  3. チームにおける成果（プレゼンテーションをはじめチームの成果）  
トータル…10点満点
- \*2, 3の評価は最終評価（プレゼンテーション）だけでなく、グループ活動への参加度合いも公平に評価する。履修生同士による、各グループ内の相対的な個人評価、グループ間の相対的なグループ評価も参考にする。

図5 グランドルール

1. 参加者1人1人は大切なパートナーです。お互いの尊厳を大切にしましょう。
2. 極力否定語は肯定語に置き換えて表現してみてください。
3. 本来、失敗はありません。あるのは、学びです。
4. 考えたこと、感じたこと、やりたいことを、まず表現してみましょう。
5. 疑問も大切にしましょう。
6. お互いのオープンなシェアリング（共有化）が新しい観方を拓げます。
7. 知ったプライバシー情報は口外せず、話は心で聴きましょう。
8. みんなの意見を大事にする場をつくっていきましょう。



## LINE の活用

本科目の教育手段として対面の他，本学 LMS (Learning Management System)，メール，facebook をはじめ，履修生との連絡には LINE を活用した。SA からの課題の提示と回収，課外活動での集合時間のリマインドや状況確認，撮影写真のアルバム収納など，互いの投稿に承認をしあい，常に状況を共有して進めた。

図 6 LINE の活用例



## 4.3 キャリア開発理論「ダイナミックプロセス型キャリア論」の導入

本科目の基本になる理論として「ダイナミックプロセス型キャリア論」を授業で紹介した。企業で開発されたこの理論は，大学生活におけるキャリアコンピタンスの育成においても重要である。

図 7 ダイナミックプロセス型キャリア論

「人生何が起るかわからないという考えをベースに節目や変化をどのように自ら勝ち取っていくかに焦点をあて，変化をおこす力，変化を乗り切る力，変化の後のフォローの仕方を個人が学び実践すること」を重視している。

自分が「こうしたい」というキャリアビジョンとゴールを持ち，それに役立ちそうな力を磨くこと，想定外のことが起こったときに，自分には対応できる力があることを理解することが重要で，自分の心を常にオープンにし，また従来の対応に固執しないことが重要

引用：花田光世 (2013) 働く居場所の作り方 日本経済新聞社

## 4.4 各プロジェクトの内容

### プロジェクト1「避妊・不妊・赤ちゃん遺棄問題」

不妊カウンセラーの池田麻里奈氏を招聘し，講義では，女性のライフイベント

トとステージ（妊娠・避妊・不妊）、身体のおくみ（妊娠できる時期・体外受精）、予期せぬ妊娠・赤ちゃん遺棄・児童養護の現状について学び、議論を行った。課外活動では都内の乳児院を訪問し院長の講話と院内を見学した。入院の経緯、社会的課題と、院長の方針についてうかがった。池田氏より提示された議論のテーマは以下のとおりである。

テーマ：1. トイレに赤ちゃんを捨てた母親だけを責めて終わりか、2. 予期せぬ妊娠をした人に対して自分ができることは何か、3. 赤ちゃんを託す母親の気持ちを考えよう、4. もしもあなたに、家族に、親友に…関連する何か出来事がおこったときできることは何か。

図8：乳児院見学の様子



## プロジェクト2「ホームレスと社会問題」

ビッグイシュー日本東京事務所長の佐野未来氏を招聘し、ホームレスをとりまく社会問題、ホームレスの現状、「BIG ISSUE」誌（日本版）の取り組みについてうかがった。課外活動では、実際に路上でビッグイシュー誌を販売する体験プログラム「道端留学」に参加し、新宿駅西口付近にて販売者による販売アドバイスを受け、90分間の販売の後、ビッグイシュー東京事務所での振り返りを行った。佐野氏より提示された議論のテーマは以下のとおりである。

テーマ：ホームレスを取り巻く社会問題を解決するために、自分ができることは何か。

図9：ホームレス問題について議論



図10：道端留学（販売体験）



図11：ビッグイシュー東京事務所の前で



### プロジェクト3「死生観と孤独死問題」

黄檗宗寶林寺（群馬県邑楽郡千代田町）の新堂，海野峻宏氏（卒業生）を招聘し，死を迎える人たちをとりまく社会問題（孤独死），葬儀形式の変遷とお寺の在り方，個々に持つ死生観の例についてうかがった。課外活動では，海蔵寺（東京都港区北青山）を訪問し，住職の海野和之氏の講話，読経，坐禅体験を行った。海野氏より提示された議論のテーマは以下のとおりである。

テーマ：死を迎える人たちを取り巻く課題に対して向き合うには自分自身がどういう考えを持てばよいか。

図 12：海蔵寺にて



### 3つのプロジェクト終了後の学びの発表と振り返り（第14回）

本科目では、各ラウンドでのプレゼンテーションは実施せず、議論を深めること、自ら考え意味づけすることを重視した。3つのラウンドが終了した翌週に、ゲストスピーカー3名も同席し、履修生全員が個々に学びのスピーチを行った。スピーチではゲストが順に発表者個々へのコメントをし、総評を行った。スピーチのテーマ：何が問題でそれに対して自分は何を感じたか。

図 13：学びのスピーチ（授業第14回・90分間）のながれ

- 
1. 導入：10分間  
ゲストの紹介とこれまでの授業の流れの説明（教員）・一言挨拶（全員）
  2. 学生スピーチ：55分間  
学生スピーチ（5分間）＋ゲストコメント（1分間）×8ラウンド（履修者数）  
授業で何を感じ、何を学び得て、今後はどう活かしていくか、5分間自由に語る
  3. ゲスト総評：15分間  
ゲストより学生たちへエッセージ（各5分間）
  4. 教員によるまとめ：5分間  
まとめ・写真撮影 事務連絡・教室原状復帰
-

図 14：学びのスピーチ



### 総まとめ（授業最終回）

授業すべての回の振り返りと、この活動おける振り返りとして全員が全員に対して「SBI フィードバック」を、今回は付箋を用いて個々が全員に対して行った。

SBI フィードバックとは、S (Situation/どのような場面)、B (Behavior/どのような行動で) I (Impact/どのような影響を与えたか) を具体的に伝える手法である (立教大学 GLP 2016)。

## 5. 授業実践における評価と考察

### 5.1 履修生対象質問紙調査結果

授業最終回の終盤に、履修生を対象に質問紙調査を行った。最初の質問項目は履修動機を問うものであり、各項目とも、「5. よくあてはまる、4. ややあてはまる、3. ふつう、2. あまりあてはまらない、1. まったくあてはまらない」の5段階のリッカート尺度によって数値化した（カッコは平均）。履修動機で最も支持が多かったのは、「いろいろな人の生きかたに興味があるから」(4.63) であり、次に、「ゲストの話を聴きたいから」(4.50)。それに対して「単位がほしいから」(1.25)、「周囲から勧められたから」(2.13) が最も支持が少ない結果になった。

続いて授業で何を学び得たかを問う質問紙調査を行った。これは過去に担当

したキャリア教育演習科目「キャリア・モデルケーススタディ」(正村 2015)の履修生のコメントを参考に、本実践の研究に沿うよう筆者が独自に作成した。各項目とも、「5. よくあてはまる, 4. ややあてはまる, 3. ふつう, 2. あまりあてはまらない, 1. まったくあてはまらない」の5段階のリッカート尺度によって数値化した(カッコは平均)。授業における学びで最も支持が多かった順に、「知らない世界を観た」(5.00), 「技術・スキル・能力も大切だが, 人間力(態度・姿勢・意識)も大事と気付いた」(4.88), 「自分の人生を実りあるものにしたいと思った」(4.88), 「人を大切にしたいと思った」(4.88), 「多様性の重要さを理解できた」(4.75)であり, それに対して最も支持が少ない順に, 「ビジネスマナーが身に付いた」(2.88), 「逆境に会ってもチャンスをつくる力が身についた」(3.25), 「自分のこれまでの人生に自信を持てた」(3.25)の結果となった。

## 5.2 履修生の学び(コメント抜粋)

授業最終回終盤に, 履修生を対象にこの授業を通しての気づき・学びに対する感想を尋ねた。その回答を抜粋して以下に記す。

### 授業全体を通して気づいたこと

- ・ 知らないこと, 無関心なことが問題だ
- ・ 「知らないことにどう対応するか」を考えさせられた
- ・ 人と人とのつながりが大事, 心の居場所と物理的な居場所が大事
- ・ 人生を, 倫理観, 道徳観, 死生観から見直す機会を持てた
- ・ 満足度と幸福度の違いは何だろう, 答えが出にくい
- ・ 仲間の価値観を知り多様な生き方とその背景を知ることができた
- ・ 口にする機会がなく考えたこともないことを考え, 議論し理解し, 問題を発見した
- ・ 考えながら経験することも大切
- ・ 経験は自分を変える
- ・ もっといろいろなことを知って経験したい

### 授業を通しての感想

授業の詳細を知らずに履修した。初回のオリエンテーションを受け, やりき

れるか不安があった。第2ラウンドのホームレス問題の話聞き、後日、渋谷で販売者のかたと話げできた。「(社会問題の1つを)知った」ということがまず第1ステップ。授業全体を通して、知れば知るほど理解が深まっていった。我々は知ることができたが、義務教育でもこのような機会は重要だと思ふ。目的を共有しているメンバーと「自分達にも何かできないか」という議論できたことがよかった。(履修生A)

授業での一番の収穫は語り合える仲間(ゲスト講師や履修生)に出逢えたこと。これまでビッグイシューのことを知らずホームレスは私には関係ないと思っていた。佐野さんの話を聴いて衝撃を受けたと同時に、知らないという自分に対しての罪の意識と、偏見や色眼鏡で見ていた自分に残念な気持ちだった。様々な社会問題を知って、経験して、考える、その重要さがわかった。販売者のかたの人生への挑戦に、自分自身も「行動しないと何も始まらない。やらなければ自分は何も変わらない」と思ふ。ビッグイシューの取り組みをみんなに知ってもらいたいと思ふ、大学祭でビッグイシュー誌のバックナンバーの販売と、チラシを作成し無料で配付をする。(履修生B)

プロジェクト1の避妊・不妊問題は男性も考える重要なテーマであり普段自分たちが思っている「あたりまえ」はあたりまえでないとわかった。例えば、芸能人が一児のパパになったニュースなどを耳にするが、それは本人たちにはすごく幸せなことであたりまえでない。プロジェクト2のホームレス問題については、ひとくくりできない様々な社会問題がからみあっている。ホームレスに限らず、社会保障やベーシックインカムに話題は発展していった。プロジェクト3の死について考えるテーマは難しかった。死ぬことはこれまで考えたことがなかったが、人はいつ死ぬかわからない、今を一生懸命生きることが重要だとわかった。各ラウンドの4つのステップ(知る→体験する→考える→議論する)が重要だと思ふ。知る・体験するのみでなく、自分事として考え、自分事として言葉で表現し議論をする重要さがわかった。(履修生C)

ディスカッションが多く、人の考えを聴き自分も発言したが、正解も間違えもなく答えがでないこと、でるようなものでないことを考え、もやもやとしながら授業が進んだ。自分の知らないことばかり。解ったのは、全体的に(どの

テーマも)最終的には、人とのつながりが重要であり、周囲に相談できる人、精神面で支えてくれる人が必要だと思う。わたしは大学の制度でピアチューター(学生の相談にのる役)を担っているが、学習面だけでないサポートもしたいと思っている。クラスの友達や学校のカウンセラーに話すのもちょっと…といった学生の悩みをサポートしたい。わたしは人見知りで、相手の話を聴きだすことが苦手で、こんなことを訊いたら失礼かもしれないと躊躇してしまう。自分のような人は周囲にもいるはずだから、そういう人にも相談にきてもらいたいし、支えになりたい。(履修生D)

**問いかけ：体験を自分の経験としてどれほど語ることができるか**

体験しても、自分がその状況の立場に実際にたったわけでない。自分のことのように理解して語ることはできない。同情でなく状況に理解を示す姿勢で語りたい。(履修生A)

この問いに対して自分なりに全力で考えた、だが、まるで自分はすべてを知ったかのように話すのは違う。今後、社会で経験していく、そのときに、この体験が経験として身につくことができると思っている。(履修生B)

このような体験を、体験していない相手に伝えることは実際難しい。授業が終了し時間が経っても言葉にできないもやもやがあり、整理できていない。(履修生C)

体験を自分の理解の範囲で話しながらも、理解しきれないもやもやは消えずにいる。このもやもやを持ち続けることで、将来どこかで何かにつながり発見があるのだと思う。(履修生D)

### 5.3 ゲストスピーカーによる所感(コメント抜粋)

本科目を構成していく過程でゲストスピーカーと議論を繰り返した。社会問題と向き合う授業において、下記3点をもとに内容を構成した。

1. あえて知ること。知っていれば後悔しないことを知る。
2. 自分事として考える、自分たちで学びあう。
2. 行った、体験したでおしまいにならない振り返りを重視する。



授業最終回の後に実践を振り返り、ゲストスピーカーより以下のコメントをもらった。

プロジェクト1「避妊・不妊・赤ちゃん遺棄問題」では、自身の体験した流死産と、親と暮らせない乳児院の赤ちゃんの問題を取り上げた。どれも日常では触れることの少ない内容で、当事者の抱えている悩みに寄り添うのは難しいことながらも、課外活動を通して実際に自分の目で見て体験することができたこと、その後の議論の時間がしっかり確保されていたことで、回を重ねるごとにクラスがひとつになるのを感じた。特に、自分とは異なる他人の意見を聴く姿勢、自分の考えをしっかりと伝える力を（学生は）身につけたように感じた。このようなテーマは社会に出てから役に立つことだが、教えてくれる場所はなかなかない。（ゲストスピーカー：プロジェクト1）

プロジェクト3「死生観と孤独死問題」では、講師、学生の垣根なく、その場にいる人すべてが思考を余すことなく働かせ、各自の意見を交わし合った。「死生観」について考えることが初めてで、さらに他人に自らの死生観を共有することは各々にとってハードルが高い。その中で、自分の考えをどう表現するか、そもそも死生観とはなにか、と一度立ち止まって考え、他人の意見を参考にしながら自らの死生観を形成していくきっかけを創り出せたのではないか。答えのないテーマを題材にしたことで、それぞれの考えが形成されるよいきっかけであった一方で、この講義としても着地をどこに見出すかは難しい。思考するだけでなく、「感じる」ことのできる場をさらに提供することができれば、より死生観の形成を具体化することが可能である。（ゲストスピーカー：プロジェクト2）

#### 5.4 考察と課題

##### 履修生の継続的实践の成果

前述の通り、履修生自らが「BIG ISSUE プロジェクト」を発足し、授業終了4ヶ月後に開催された大学祭（2017年度）にてバックナンバーの販売とチラシの制作・配付を行った。チラシは600部を配付し、ビッグイシューの取り組みについての広報活動を行った。ここまで至るに、学内教職員への相談・交渉から、ビッグイシュー東京事務所との連携など、学内外関係者と何回も打ち

合わせをして実現に至った。

### 到達目標の着地点

キャリア開発演習科目においては、授業で完結せず、授業終了後も自ら問題を発見し向きあい、考える習慣をつけることを到達目標にすることが重要ではないか。学生はもやもやしたままで、達成感は得られずに課題も残るが、学生自ら行動をおこし別の場で力を発揮することを期待する（ピアサポーターとしての実践、専門科目・ゼミ活動への反映など）。

### 実践の汎用性

本科目の今年度の履修生は8名と少人数で、全員が意見を述べる場が形成できた。このような授業は少人数だから成り立つのか。大人数の授業の場合はまず理論的背景を説明するなど授業設計と展開方法を探っていく。また、汎用性という面では、他大学で実施する場合の講師の招聘や課外活動の実施についても（曜限等の科目設置の問題含め）、実践マニュアルやワークシートの制作を検討する。

### 他科目との連動

本科目の履修生は、初年次キャリア教育科目や前提科目をはじめ他のキャリア科目を履修し、既に土台がつけられ、また各学部のゼミ活動で学んだ専門の知見も持ち寄り学び合う場を形成した。この科目単独でなく他の科目（キャリア教育科目・各専門科目）との連動をどう図るかを今後の課題にしていきたい。

## 6. おわりに

### 6.1 2018年度のテーマの再設定と注意点

学生からの提案として、LGBTと難民の問題がでている。「多様なライフキャリア」を軸とするか、「多様な他者との関係構築」を軸とするか、設定したテーマを掘り下げる視点も今後の大きな課題である。ゲストスピーカー・履修生等への配慮（全員が安心して居られるように）、また課題の視点が社会政策に偏らないよう全員が当事者意識を持ち考えるべきこともある。言い回しにはアイメッセージ（わたしはこう受けた）を意識していく。

テーマには正解がなく（正解がひとつではなく）、活動内容の捉え方も人それぞれであるゆえ、シラバスやホームページをはじめ情報の公開に一層の配慮が必要である。学生への授業広報活動においても都度確認をとりながら進めていく。授業を展開するにあたり教員と履修生との関係構築を重視し、既履修生によるピアサポートにも期待している。

## 6.2 学びの場の設定とアプローチ

課題に正面から向きあうことを大切にしていける。学生が評価を意識しすぎて期待されている体験のしかたをしないよう注意が必要である。体験と経験は異なる。無理にルールにのせすぎないことが重要ではないか。学生が社会人との関係を直接構築し互いに意見を言いう課程で、失敗や問題を解決しあえる関係を構築していく。

このようなプロジェクト科目（半期2単位・90分間×15回）では、活動の範囲（距離や所要時間）、成果のレベルには限界がある。しかしこの状況での学びを十分に振り返ることで、普段の生活の場がまさに学びの機会になり、その学びを習慣づけていくことが個々のキャリア形成につながるであろう。そのために振り返る機会を効果的に持つこと、また学びを深化させるために理論的背景から社会問題を意味づけることも重要である。

恥をかかさない・失敗をさせない対策や豆知識やテクニック・知識を教えるのではなく、経験を通して自ら対処できる力を身に付けることが、正課の授業として重要ではないか。プログラム化されている社会において、問題を起こさない、解消させるための策でなく、偶発をはじめ不透明・不明解、未解決に能動的に関わることからキャリア自律に繋げていきたい。

学生のアンケートやゲスト講師のコメントから授業実践を述べてきたが、実際の効果をどう図るか、学生の成績評価基準や、成長の度合いを測る尺度の開発は今後の課題とする。

### 謝辞

本科目の授業に出講くださった、コウノトリこころの相談室の池田麻里奈様、二葉乳児院院長の都留和光様、ビッグイシュー日本東京事務所長の佐野未来様、同広報の長崎友絵様、海蔵寺住職の海野和之様、寶林寺新堂の海野峻宏様、ご助言くださった社会イノベーション学部名誉教授の大隈宏先生、キャリア研究会会長（日本体育大学教授）の本間啓二先生、関西学院大学社会学部教授の阿部潔先生、慶應義塾大学特任講師の櫻田周三先生、一緒に授業をつくり質

問紙調査にも協力をしてくれた履修生全員に感謝を申し上げます。

#### 引用・参考文献

- 浦上昌則・高橋睦美・杉本英晴・矢崎裕美子 (2017) 「Planned Happenstance 理論を背景とした境遇活用スキルの測定」南山大学紀要「アカデミア」人文・自然科学編 第14号, 49-64.
- 島本好平 (2006) 「大学生における日常生活スキル尺度の開発」教育心理学研究 54(2), 211-221, 日本教育心理学協会
- 正村あづさ (2015) 「大学のキャリア教育における, 「ダイナミックプロセス型キャリア論」に基づいた授業の実践・検証と汎用モデル構築」慶應義塾大学, 修士論文
- 菅原良 (2017) 「大学におけるキャリア教育の変遷と複雑化・高度化する21世紀型キャリア教育の方向」キャリアデザイン研究 Vol. 13, 137-143, 日本キャリアデザイン学会
- 成城大学事務局就業力育成支援室 (2012) 『成城大学就業力育成・認定プログラム成果報告書』成城大学
- 中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会 (2011) 「今後の学校教育におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申)」
- 坪井健 (2012) 「ココロのバリアを溶かす: ヒューマンライブラリー事始 (ことはじ) め」駒澤大学社会学科坪井ゼミ編著人間の科学新社
- (2017) ヒューマンライブラリーから見た異文化間能力-コンピテンシーを育てる実践の立場から- 異文化間教育 45号, 65-77
- 東海林祐子 (2012) 「大学体育授業がライフスキルの獲得に与える影響: 単元前の学生のスキルレベルに着目して」Keio SFC journal Vol. 12, No. 2.
- 独立行政法人日本学生支援機構 (2017) 「大学等における学生支援の取組状況に関する調査 (平成27年度)」
- 花田光世 (2013) 『働く居場所の作り方』日本経済新聞出版社
- 文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会 (2015) 「教育課程企画特別部会論点整理 (案)」
- 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター (2016) 『体験の言語化』成文堂

#### 引用・参考文献 (URL)

- 櫻田周三 (2010) キャリアラボコラム キャリア・リソース・ラボラトリ  
<http://crl.sfc.keio.ac.jp/mt/www/main/post-3.html>
- 慶應義塾大学総合政策学部 生活者の社会参加 2017年度シラバス  
<https://www.sfc.keio.ac.jp/>
- 日向野幹也 (2012) コーチングとSBI フィードバック  
<http://www.mhigano.com/blog/2012/05/sbi-b7b4.html>
- 立教大学グローバル・リーダーシップ・プログラム (GLP)  
<https://www.facebook.com/glprikko/videos/1149960248373453/>
- コウノトリこころの相談室 <http://kounotori.me/>
- 社会福祉法人二葉保育園 二葉乳児院 [http://www.futaba-yuka.or.jp/int\\_nyu/](http://www.futaba-yuka.or.jp/int_nyu/)
- 有限会社ビッグイシュー日本 <https://www.bigissue.jp/>

社会問題に向きあうキャリア教育の実践と課題

黄檗宗寶林寺 <http://hourin-ji.strikingly.com/>

(access 2017.11.30)